

March 8, 2010

インド・アジア開発

溪谷からの呼びかけ

PoK へ越境しているカシミールの若者へのリハビリ策を打出すも、ギャップ残る

事態がさほど深刻でなかったなら、印パ間の差し迫った対話はずんばの対話に近い、双方が相手に対して聞く耳を持たないからである。パキスタンはカシミールを話題に持出そうとし、インドは逆に話題にする根拠を密かに消去している。カシミールの若者を駆り立てて銃を取らせた疎外感をインド政府は払拭する戦略を展開している。

内務省が住民の気持ちと考えを獲る戦略と称する、この心理戦は 2 月初めに **Jammu and Kashmir** 州首相 **Omar Abdullah** が提案し、内相 **P Chidambaram** が即座に前向きの反応をしたもので、ミリタント・キャンプでの訓練を受けるべくパキスタン実効支配地(PoK)へ越境している若者の自首とリハビリ政策に重点を置いている。州政府はその種若者—16 歳の少年もいる—の家族から息子達が戻れるような便宜を嘆願されており、**Chidambaram** 内相は **PoK** もインドの一部であるゆえその種若者の戻ってくるのは歓迎すると言明しており、彼は両国外務次官会議を控えて、対パキスタンの得点になる好機と受取った。

内務次官 **G.K. Pillai** は、本政策の骨子を内務省と州政府で詰めており、3 月末までには出来上がる、と述べている。然しながら、情報筋は、斯様な微妙な問題は急ぐべきではないとしており、元情報機関長官 **A.K. Doval** は「その種若者が **PoK** へ越境して行ったのは、彼等がある種のイデオロギーを確信していたからである。彼等が戻ってくる本当の理由を把握する手段を政府は見つけなければならない」と指摘している。

内務省筋は、家族を含めた集中洗脳、職斡旋、を含む全てを織り込んで政策を決定する、また、彼らを情報機関の目や耳にするのではない、しかる後恩赦するとしている。然し、専門家は以前降伏してきた連中との兼ね合い、つまり、恩赦は奴等にも及ぶのか？ テロ関与で手配されている連中は？ 奴らは断罪されるのか恩赦になるのか？と懸念している。**Doval** は「政府が政策策定に際し念頭に置くべき問題がそれら諸点である。基本的に政策の方向は良いことである」と述べている。

政策が実施される場合、少なくとも政府と情報機関は非抑圧的手法で彼らを見張ることは可能だろう、と内務省高官は言っている。州政府統計によると 2008 年に少なくとも 20 名以上、2009 年には 63 名が戻ってきている。

然し、会議派内部に反対者もあり、**Chidambaram** 内相にとり政策実施は容易ではないかも

しれない。J&K 州前首相 Ghulam Nabi Azad は「改心者の装いで戻ってきたのか、後悔したミリタントなのかをモニターするのは難しいだろう」と述べながら態度保留を表明している。防衛大臣 A.K. Antony も亦、実効ライン越えの越境が増えてきた、と主張している。然し、内務省筋は「その種要素だけで、戻りたいと言う数百名の若者を拒否すべきでは無い。戻りたいと言う若者は 800 名と推定されている」と言う。

政府は、カシミール統治を軌道の乗せる方向で徐々に動いてきた。軍隊撤退と主要都市からの中央政府保安隊引揚げは既に開始された。過去 2 年余で 2 師団（約兵士 3 万人）が州警備から撤退しており、州内の保安整備完了地域を州警察に引渡して中央政府保安隊 10 部隊（約 8000 名）が引揚げた。「地方警察の方が方言、問題、ニュアンスをより良く理解する。2010 年 6 月までに政府は諸機能を州政府に引継ぎ、中央政府保安部隊は 2011 年の年末までに他の地域と機能を引き渡す方針である」と Pillai 内務次官は言っている。

Chidambaram 内相は保安部隊による人権侵害は絶対に許さないと明言してきており、国境警備隊がティーンエイジャー 1 名を殺害した事件も厳しく処断された。斯様な厳しい処置が現地の安寧を齎すことを期待したい。

By Bhavna Vij-Aurora
India Today, March 1, 2010